

京鹿子

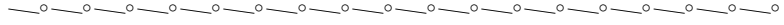
昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成十九年十一月一日發行
通巻九十九号（毎月一週一日発行）

11月号

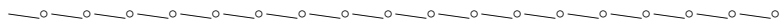
祝千号
丸山佳子

神 ながら 祝 千号 師 は 松 の 芯
父 の 日 に 賜 は る 一 粒 万 倍 日
い の ち 尊 し 時 の 記 念 日 め ぐ り 来 て
「 志 」 低 き が ゆ か し 花 南 天





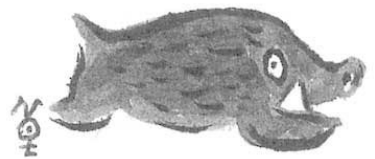
鳥は雲に何か言いたげ望遠鏡
花榊わたしにすぎる御尊天
底ぬけに楽しい汗でトンネル抜け
のど仏のない白鳥に飴一と粒
万緑の嵯峨にも人を刺す草が
あしたの雨に濃きあぢさゐが頭地礼



豊 田 都 峰

清響集 その七十九

分 水 嶺 雨 雲 吐 き て は 夏 逝 か す
石 仏 の 露 ま み れ な る 朝 ぼ ら け
や ぶ 抜 け て 露 め く 足 音 ま だ 曳 け り
か や つ り 草 か げ も た し か に 風 の 中
み こ こ ろ の た だ ひ と す ぢ を か ざ る 萩



和山竹田城址九句

霧裂きて大手前なる岩の礎
芝の露しげし大手門址とす
白日の霧はらしゆく山城址
累々と城塞組みまれ霧の海
高々と霧抜く石組穴太積
山霧の去来の月日天守址
秀長も立ちし天守も霧の中
残しきし山城を占む星月夜
山城の漆黒の黙星流る

鈴鹿 仁

鬼の捨子

鬼の子と呼ばれ一糸の虚と実と
蓑虫の蓑のおもはく風に聴く
しかじかと鬼の捨子のおもはゆし
少女くる風の弾みし野菊道
野菊摘む背高地蔵は風の的
秋暑し過去へ振りむくことはせず
神在す風の意となる萩人中

近 詠

宇都宮滴水

八月の影

雨季の径傷兵を負ふ兵も病む
月夜茸斥候兵は消えしまま
重砲火某日某夜の月隠る
徒ざくら担送兵は深ねむる
インパール指呼に無念の天長節
八月の影はビルマの野に忘る
終戦忌助詞のひとつに躓きぬ

神麓集



晩秋のおちかた遺跡狩人画
弥生土器シカ射るかりうど線刻画
銅鐸の狩猟の絵画秋閑くる
珍らしき手焙形の弥生土器
線刻画手あぶり土器も祭祀用

林 日圓

一葉落つ 藤岡 紫水
禅刹の椀は大ぶり新豆腐
日の翳る音して又も一葉落つ
百日紅一朵の雲に飛び火せり
くぐもりて鳴る土の鈴秋暑し
汐焼けの海女が髪梳く浜の盆

白百合や乃木崇拜の希山逝く
校庭の胡瓜を賞でつ投票日
カンナ燃ゆ激参院の投票日
二時間の能に憑かれし梅雨籠り
今更に買替ふる羽目冷蔵庫

北村 香朗

五箇山の親しき辞儀や吉丁虫
ラムネ噴きこぼして五箇の山傾ぐ
階下より夏炬の烟隠れ里
民宿の裏に並べて日向水
ゴムプール干して五箇山ぐらしかな

五箇山 和田 照海

夏落葉 丸山 冬鳳
大暑その舗道剥がれて青苔も
夏落葉風の言葉も禽声も
蝸の一と節長く編む妻よ
そよろそろ風の平和な萩若葉
蛸や夕空雲のかけらも無く

沙羅の花古刹伝説多く秘め
十葉や閻魔が裁く首二つ
梅雨早り玉を唾へて魚板朽つ
恩賞に一千石や濃紫陽花
石坑島灼くる哀しき廃鉱区

角 直指

神麓集



見目姿匂ひ等しい桃届く
糸蜻蛉いたづら風が尻を押す
炎日の根負けしたる観覧車
撒水の次いでに鉢を溺れさす
警笛の線路にやんま我を通す

やんまの我

彌寝

瓶史

手ごたへのあるかなきかの鱧を釣る
溜息のやうに明滅迷ひ蚩
梅雨さなか独りを楽しむ日もありて
一杯の冷酒にとろり肩ゆるむ
老の壁分厚さ増して秋立てり

丹生をだまき

口の端の愚痴きいてゐる暑さかな
八月の青き地球の住み心地
白日傘黒日傘とて橋渡る
人の世もかくある如し走馬灯
吊橋に闇を率ゐて来る蚩

船越

美喜

炎昼貫^ぬき指すは渚の摩天楼
水浴や真夏の碧を一気呑み
箱入りの肌もプールにきつねいろ
シヤンソンを降らせ鳳梨のムース甜む
夏の宿舟灯淡き湖に昏る

夏の宿

荻野

千枝

冬日和 竹貫 示虹
六根に警策ひびく冬日和
冬天に連嶺置きし深呼吸吸
木の葉散るひとひらごとの思ひかな
山茶花や墨色にしむ新塔婆
嶺々残照刈田に暮色ゆきわたり

頭のみ冴えクーラーの音身に迫る
炎暑来てそつとベッドに近寄る娘
炎天に工事騒音絶食中
病室に大暑の午后を検査待つ
検査終へ呂律回らず街薄暑

山田をがたま

神麓集



黒い雨 川崎 光一郎
山並を超えて 孤高の雲の峰
黒い雨の原風景か雲の峰
原爆忌次の世もその次の世も
あの時を憶ひ起せと仏法僧
張りつめて張りつめてつと滴れり

土用あい 北川 孝子

土用あい無明の影とつれ立ちて
土用あい影にもいのちありにけり
薄荷水おのれにあまき午後三時
土用東風一年がかりで読む聖書
涼風のひとつひとつにある記憶

奥村 鷹尾

錦木の花屑さはに苔飾る
芝を刈り遅れ文字摺苑に充つ
仔連猫保健所送りもて落着
庭苔も蹴散らし去りぬ仔連猫
恋猫を抱いて近隣詫び歩き

昼顔 森津 三郎
卯の花や水琴窟のかすかなる
もうすぐに咲くかも知れぬ車輪梅
行きずりの漫画喫茶の冷コーヒ
男には犬の散歩の暇がある
昼顔の路地を曲るいそぎ足

追悼 上田かつみ様 高木 智

もう逢へぬ思ひは桜吹雪かな
立てば逃ぐ雀立たねば滲む汗
庭動ぐお羽黒跳んで一呼吸
一齋に掌を挙げ躍る玉すだれ
目つむれば辞世を思ふ晩夏なり

稲妻 柴田 朱美

稲妻や能面の口深裂けて
手枕のやはらかき昼稲光
山国の闇稲妻が押し開く
狼貌を隠せぬ誤算稲光
稲妻や石仏の顔削がれみて



京鹿子集

豊田都峰選

メキシコとの国境超えて虹かかる

虹見た日クレヨン好きの子に電話

明け易し一番機発つ滑走路

あぶら蟬波長合ふこと知る異国

カプトムシ子の問ひ解きに大学へ

過疎化とて故郷は佳し端居かな

久びさを詫びつ草取る墓前かな

踊の輪一人二人と消えにけり

七月来身近となりし仏妻

山蟻の夢は出稼ぎ熔岩の道

アヲチ 伊吹 之博

所沢 牧野 麦芽

片陰を求む折鶴漂へり

八月の折鶴にみずみず水

青梅雨に睦む犀星夫婦桶

道ひとつ違へし夕ほととぎす

三伏や氷室の跡の朽ち柱

大瑠璃に俗耳はなれていくばかり

梅雨ごもり猥一頭を育くまむ

桑の実熟れ少年Kの厚き唇

麦の秋夫の旋毛の在りどころ

栗の花どこか虚ろな鏡池

千葉 河内 桜人

千葉 伊藤 希眸